【中学校の部】優秀賞

受け継ぐ

大分市立南大分中学校　２年
姫野　克喜

ぼくは、４年生の時、親から、「ねぇ、太鼓に興味がある？」と聞かれました。僕にとって太鼓は地域のお祭りの時に少しだけ体験したくらいのもので、ちっとも興味がありませんでした。しかし幼稚園の時の１つ上の友達が入っているということで、見学に行ってみることにしました。

初めて目の前で見た太鼓は、とても大きな音で、耳をふさぎたくなるほどでした。幼稚園の入園式でみんながお祝いの歌を歌ってくれた時の大きな声に、思わず耳をふさいでしまったことをなんとなく思い出しました。ところが、見学に行った先輩方の演奏は幼稚園の時とは違っていました。すべての動作や音、掛け声などがそろっているかっこよさに加え、一人一人の表情に引き込まれていきました。これが、僕と小潮太鼓との出会いです。何度か見学を重ね、先輩の姿を見たり、先輩から声をかけてもらったりしたことで、自分でもやってみたい、できるようになりたいと思うようになりました。小潮太鼓には、４年生から高校３年生までのメンバーがいます。僕が入ったときは、同じ学年が一人しかいなかったので、先輩たちがたくさん声をかけてくれました。僕は、先輩と呼べる人たちができてうれしかったです。先輩たちが４年生だったころは、人が多すぎて太鼓にさわれず、練習は素振りばかりで友だち同士の競争が激しかったと聞きました。

小潮太鼓を続けてきて力になったことは、人前に出ることがそれほど苦手ではなくなってきたことだと思います。以前は学校で全くというほど発表しなかったし、クラスで劇などをするときは、自分から役をすることはせずに、音響や道具作りなど、好んで裏方の仕事をし、人前に出ることを極力避けていました。

僕の初めての演奏は、僕の住む地域最大の「みなみおおいた夏祭り」でした。目の前には僕の知っている友達もたくさんいました。初めて知らない人の前で演奏するだけでも緊張するのに、自分のことを知っている友だちに、日頃とは違う自分を見せることがすごく恥ずかしかったのを覚えています。

小潮太鼓は地域の方からの出演依頼が年に30回くらいあり、そのたびに演奏をさせてもらっています。練習と公演を積み重ねてきたことで、自分の演奏に自信を持てるようになり、人前に出ることにもだんだん慣れてきました。時には、演奏を聴いてくれる人に笑顔を見せる余裕も出てきました。自分が成長しているなと感じています。このような自分の成長は、小潮太鼓に依頼をしてくれる方々がいるからこそできたものです。また、毎年継続して依頼してくれるのは、先輩方が創り上げ、築いてきたものがあるからです。

演奏が終わった後、必ず主催者の方にお礼のあいさつに行きます。これも先輩方から受け継いできた伝統の１つです。これはある主催者の方からいただいた言葉です。

「たくさん感動をいただきました。人に感動を与えられるということは、皆さんが日頃から感謝の気持ちをもって練習したり、公演されたりしているからだと思います。これからもたくさんの方々に感動を与えられるように頑張ってください。」

感謝する気持ちや伝統を受け継ぐなど、意識をして練習しているつもりはありません。人から言われて初めて、一つ一つの行動が実は伝統を受け継ぐこと、礼儀作法を学ぶということにつながっていたのだと気づきました。

これからもっと練習をして先輩が僕に教えてくれたことを下の子たちに伝えていけるようにしたいと思います。